

おかげさまで発足 40 年 立田山自然探検隊の今昔物語

～ 子ども達の自然を観る眼、感じる心を育もう ～

立田山自然探検隊 前会長（第5代） 藤井由幸

立田山自然探検隊 新会長（第6代） 長濱朋昭

■立田山自然探検隊の発足

熊本市の中心部から北東に位置する標高 152m の立田山は、市街地に残された貴重な自然緑地ですが、その緑地も昭和 40 年代、宅地開発の危機に見舞われます。民有地緑地のこれ以上の開発を防ぎ、市民の生活環境を保全するため、昭和 49 年度（1974 年度）から県市一体となりその公有化を進め、最終的に平成 7 年（1995 年）10 月に約 150ha の買収を終了しました。確保した緑地は、自然の森に復元し、市民の憩いの場づくりを行い、生活環境保全林「立田山憩いの森」として多くの市民の皆様に健康づくりやふれあいの場として利用されています。

この民有地緑地を公有化する業務（わかりやすく言えば「立田山憩いの森」整備のための用地買収業務）を熊本市職員として担当したのが私（藤井）です。用地買収が進む中で、昭和 61 年（1986 年）、熊本市緑化推進課や龍田公民館などの市職員、桜山中学や清水保育園の先生など 10 名が「公有化（憩いの森整備）後の利活用」を考える会を結成し、「先ずは自分たちが立田山を楽しもう」「会の名称は立田山自然探検隊に」「軌道に乗ったら運営を民間団体に移譲しよう」と活動を始めました。立田山自然探検隊は 昭和 62 年（1987 年）4 月 5 日、このようにして発足しました。



立田山自然探検隊発足式の様子

■自然観察指導員中心の探検隊に

ちょうどその頃、自然観察指導員講習会が南阿蘇国民休暇村で開催され、喜び勇んで受講。そこで聞いた「自然をどう観る、どう向き合う、どう利用する、どう護りどう残す」といった話は、立田山との関わり方を模索していた私にとってジャストタイミング、どれもが「目から鱗」でした。私（藤井）の自然観察指導員としての活動がスタートします。

立田山自然探検隊を発足させた市役所の仲間 10 人の合言葉は「自分達が楽しくなければ続かない。楽しさが参加者に伝わらない」。始めは自分達では何もできないので、熊本県や熊本市、野鳥の会、オリエンテーリング協会、きのこの会、茶道淡交会青年部などの協力を得て、毎月 1 回のペースでバードウォッチング、立田山 O.L、きのこ観察会、チビッ子野点など、自分達が楽しむことが

らスタートしました。

3年目を過ぎる頃から、自然観察指導員熊本県連絡会（自然観察くまもと）の熊本市地区会員の全面的な協力を得て、会長や役員は市職員から「自然観察指導員」に交代。月例会は、関係団体との共催から「自然観察指導員中心の企画運営」にと、現在の組織と運営体制が整いました。

■探検隊活動のこれまで

気が付けば39年余り。熊本市の緑のオアシス「立田山」の自然に遊び、自然に学ぶことを目的に、460回の月例会観察会を重ね、延べ1万7千人の皆さんと一緒に立田山を歩き続けてきました。

この間、初代・藤井麗子会長、2代目・三島正巳会長、3代目・小林隆史会長、4代目・佐々勝巳会長はじめ役員・スタッフの皆さん、田中裕一顧問（元中学校教諭）、山城学顧問（元記念植物採集会会長）、豊守敏夫顧問（元熊本きのこ会会長）、三宅英治顧問（元自然観察くまもと副会長）には大変お世話になりました。

三島会長の時代には、ハクセンシオマネキ観察会（天草へバスハイク）、金峰山自然の家での宿泊観察会や坪井川観察会、つつじヶ丘古墳見学会などを楽しみました。

小林会長の時代には、小林会長自身がお祭り広場周辺のトンボ調査と熱心に取り組み、池が「トンボ池」と呼ばれるようになりました。小学生高学年や中学生対象に「ジュニアリーダー養成講座」を開催。ドングリから苗を育てる「どんぐり銀行」を開設するなど新たなチャレンジがありました。

発足10年目を迎える頃には、熊本県市民に「立田山自然探検隊」の名前が徐々に認識されて、緑のリボン賞（熊本日日新聞社）や緑化功労者表彰（熊本県）を頂くことができました。

佐々会長の時代には、自然観察くまもとと「立田山ネイチャ・フィーリング」を共催。立田山の動物や植物、野鳥、キノコなどをテーマとした座学「面白ゼミナール」（講話）に取り組みました。

発足20年目頃から、月例会参加者に幼児が増え始めて「参加者の低年齢化」と「スタッフの高齢化」が課題として認識され始めました。

発足25年目に私（藤井）が5代目会長を引き受けることとなり、思い切って「幼児優先の探検隊」にイメージチェンジすることにしました。幼児や小学生低学年にも理解できるようにと、当日観察する動植物16種類の「探検シート」を考案し、事前の注意事項「危険な動植物」を紙芝居にしました。

モニタリング1000里地調査（ニホンアカガエル）を「オタマジャクシ探検」に、立田山で増えすぎたイノシシ問題を「いのしし探検」に、立田山にアサギマダラを呼ぶプロジェクトを「アサギマダラ探検」にと、立田山の調査・研究活動を月例会のテーマに取上げ（発展させ）ました。

発足33年目の平成31年度（2019年度）には「自然環境功労者環境大臣表彰」も頂きました。

新型コロナウイルス感染症の急拡大が問題になった期間中は、感染予防に配慮しつつ月例会参加者を「会員限定」にして、活動継続に努めました。

■立田山の環境問題

立田山の今日的な自然環境問題は「イノシシ」「水枯れ」「ナラ枯れ」「温暖化」と言われます。



4月例会「イノシシ探検」の様子



干上がった池に見られるイノシシの足跡

立田山のイノシシは、平成25年（2013年）12月に森林総研の立田山実験林で写真撮影されました。その後は徐々に棲息頭数を増やして、至る所に痕跡を残すようになり、夜の「星座観察会」や「ホタル観察会」が中止となります。増えすぎたイノシシが生態系バランスを崩さないか注視する必要があります。

立田山の水枯れは、「トンボ池」「サクラ池」「湿性植物苑」などの立田山憩の森の整備で生まれた人工池が、土砂流入や繁茂植物の死骸等の堆積物が原因で、30年を経て徐々に水深が浅くなり、令和6年（2024年）1月に完全に枯渇したことで、熊本市担当課が対策に乗り出しました。人工池ですが、きちんと管理して「豊かな自然環境」を取り戻す必要があります。



トンボ池の定点写真の比較。左が平成21年（2009年）、右が令和8年（2026年）
池の奥部から陸化が進行し、開けた水面が減少している。

立田山のナラ枯れは、薪、炭づくり、シイタケの原木として植えられたクヌギなどが大木となり「キクイムシ」の被害で枯死。樹木管理の不十分が原因と言われています。倒木など、立田山利用者ための危険除去のみならず「里山林管理の在り方」を見直す必要があります。

立田山の温暖化は、クマゼミの急増や南方系のトンボの出現など、月例会でも話題となっています。地球的課題の「温暖化」ともしっかり向き合いたいと思います。

■探検隊会長の交代

令和8年（2026年）4月、立田山自然探検隊会長が藤井会長から長濱会長（第6代）に代わりました。私（長濱）の立田山自然探検隊への初参加は、令和3年（2021年）12月です。その前月に宇城市豊野町で開催された自然観察指導員講習会を受講したのですが、たまたま後ろの席になった

方とお話ししているうちに探検隊の話題となり、翌月からさっそくスタッフとして参加させていただきました。それまで観察会に参加したことはほとんどなく、参加者の方々に上手く補助できるか心配でしたが、先輩指導員のみなさんからの的確な指示があり、何とか動くことができました。以降、皆勤には程遠いものの、指導員や参加者のみなさんと一緒になって楽しみながら、現在5年目です。

■探検隊活動のこれから

近年は池の水位が低下して陸化したり、外来種が顕在化したりと、探検隊が始まった頃とは状況がかなり変わった部分もあります。とはいえ、立田山には常緑・落葉広葉樹の森が残っており、森につながる草むらや水場も見られます。また、遊歩道もきめ細かく整備されており、年齢性別を問わず、野草、きのこ、鳥獣、カエル、虫、どんぐりなど、時節に合わせた自然観察ができます。ほぼ毎月実施している探検隊の観察会が、森や池の変わったところ、変わらないところに気づくきっかけになれば幸いです。

そのためにも、探検隊40年間で集まった観察データを、少しずつ整理・公開できればと考えています。動植物の分類群によって収集されているデータ量は違いますが、例えばトンボ類やチョウ類といった、馴染みのある分類群だと分かりやすいですし、「今までいたけど、今年はいなかった」「10年前まではいなかったけど、最近はたくさんいる」といった変化も実感しやすいと思います。ひとまず、過去の記録を収集するところから始めてみよう、と考えているところです。

スタッフ一同、これからも体調万全で毎月の観察会を実施していきますので、引き続きよろしくお願い致します！

“旬”の自然にふれて感じる

立田山自然探検隊

ご案内はこちら



立田山自然探検隊の連絡先

会 長 長濱朋昭 / nagahamatomoaki@gmail.com
事務局 長 益田勝行 / happa-green@xg8.so-net.ne.jp



私たちは立田山のニホンアマガエルの調査活動に取り組んでいます。